

# 東海の古代

第208号 2017年12月

会長 : 竹内 強

副会長・発行 : 林 伸禧

編集 : 石田敬一

投稿先アドレス : furutashigaku\_tokai@yahoo.co.jp

HP : [http://www.geocities.co.jp/furutashigaku\\_tokai](http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai)

## 倭の五王 — 『宋書』の倭國 — その8

名古屋市 石田敬一

### 河内

履中記では、先述のとおり、履中が難波宮から逃げて泥酔から覚めた多遅比野が福岡市の東部に位置する立花山のあたりに位置するとししました。この記事において履中記では「河内國」の地名は記述されていませんが、履中紀では、太子は、「河内國」の「埴生坂」で目覚め、難波を望むと記されます。つまり、「河内國」とあります。

河内と言え、近畿の河内が思い浮かび、通説では、この「河内國」は、現在の大府府南東部とされます。ただし、「河内國」を「國」とする点についてはやや疑問があります。というのも『古事記』では、仲哀陵が「河内恵賀」、応神陵が「川内恵賀」とあり、単に河内や川内とされ「河内國」とは記述していません。『古事記』の河内や川内をもとにして、履中紀では体裁を整えて「國」を付加し、「河内國」にしたように思います。本来は「國」が付加されていない「河内」や「川内」の地名であったと思われます。書紀編者は、近畿

の「河内國」を想定し、履中紀においては、「河内國」としたのでしょう。

実は北部九州には、「河内」の地名が広範囲に存在します。仲哀、応神の御陵について述べたときに、福岡市南区の柳河内、福岡市早良区の野河内溪谷やそこに隣接する糸島市王丸の河内川の例を挙げて、北部九州には「河内」の地名があることに触れました。

これら以外にも河内の名称は数々ありますので、以下に示します。

福岡の中心を流れる那珂川流域は、古くは、岩戸の「河内」と呼ばれています。

『筑前国続風土記 卷之六 那珂郡 下』（中村学園大学所蔵）では、「**岩戸河内**」（19/41コマ）の項に、「**仲村・五郎丸・松木・今光・道善・後野・東隈・西隈・安德・中原・梶原・片縄の12村**」とあり、これらは岩戸の河内に包括されます。

ここに示された今光・道善・後野などは、那珂川でも中流域に位置する、現在の那珂川町にある地名です。現在の福岡市の地名である老司、警固、日佐などは今光に含まれていると思われます。また『太宰管内志』にも示されている仲村は、現在の福岡市博多区那珂とする説と、那珂川の中流域にある筑紫郡那珂川町仲とする説があり、岩戸の「河内」は概ね中下流域を指すといつてよいでしょう。

同じく『筑前国続風土記 卷之六 那珂郡 下』の「五箇山」（33/41コマ）の項には、「**岩**

戸の川上、深山の内に五村あり。故に五箇山と云。網取、道枝折、桑野・河内、大野、小河内、是なり。一瀬より龜尾嶺と云山を南に越れば、則五箇山の郷内なり。此河筋にて岩戸を一河内とし、山田を一河内とし、四箇畑を一河内とし、又五箇山を一河内とす。同流の上下に四の河内あり。」とあり、岩戸・山田・四箇畑・五箇山の四つの河内があったとされます。岩戸河内は先述のとおり那珂川の中下流域、山田河内は岩戸の上流で裂田溝や伏見神社本宮のあるところ（現・那珂川町山田のあたり）であり、さらにその上流が四箇畑河内（現・那珂川町成竹や埋金のあたり）です。そして最上流が五箇山河内です。五ヶ山ダム建設に伴う集団移転の前までは、那珂川町大字五ヶ山字東小河内や字桑河内など河内の地名が残っていました。このように岩戸の川上である五ヶ山周辺も「河内」とよばれていました。また、福岡県以外でも、五ヶ山の西には、佐賀県吉野ヶ里町松隈小河内の地名、南には佐賀県鳥栖市河内町が現存するほか、河内ダムがあり、福岡市の五ヶ山周辺には河内の名が残ります。

このほか、『筑前国続風土記略』（国立国会図書館デジタルコレクション、永続的識別子：info:ndljp/pid/2541318、15／59コマ）では、那珂川沿いの仲村・五郎丸・松木・渡聖・東隈・西隈・安德・中原・梶原・片縄の10村をまとめて「岩戸河内」の項に記されます。

となると、那珂川流域を中心に那珂川町を含む広い範囲に「河内」が広がっていたことになるでしょう。

ところで、福岡市の東部にも河内が存在します。立花山（福岡市東区、糟屋郡新宮町および久山町）の東側の地域、おおむね古賀市から、福津市、宮若市、北九州市に至る地域です。

古賀市にある愛鷹神社は、現在は古賀市谷山207番地に遷座していますが、室町時代には南方の通称大目配（スパイ〔素灰〕山、409m）に鎮座していたようです。その大目配は、谷山村河内の地名でした。明治二十二年に糟

屋郡谷山村は小野村に合併され、糟屋郡小野村大字谷山となりましたが、その谷山には字河内の地名がありました。この大目配の西には、古賀ダムがあり、その地番も旧谷山字河内です。また大目配の北には薬王寺温泉があり、そこには河内池があります。このように古賀市には古くから比較的広い範囲に河内の地名があります。

また、古賀市の東に隣接する福津市には、JR九州バス停として「本木河内」が残っています。

さらに福津市の東に隣接する宮若市の若宮八幡宮は、周辺の若宮河内19ヵ村の総社であり、『筑前国続風土記』によると、「倉久、四郎丸、上有木、下有木、芹田、原田、金丸、水原、竹丸、高野、平村、黒丸、金生、福丸、岩野、伊賀利、所田、恵比、古門、以上十九村、是を若宮河内とす。」とあり、「若宮河内」と呼ばれていました。さらに、宮若市の上有木には「上有木河内」の地名が残っています。そして、北九州市八幡東区にも河内の地名が現存し、河内貯水池周辺に河内桜公園や河内温泉、河内藤園などがあり、この地域が河内と呼ばれた名残であろうと思われます。

したがって、これらの福岡市東部から北九州市に至る一帯に河内があります。

河内といえば、近畿の河内國と短絡的に結びつけるのは不適切です。

以上述べてきたように、近畿のみに河内があるのではなく、北部九州にも広範囲に河内の地名が存在する事実をしっかりと認識するとともに、北部九州の河内が古代の舞台になっていた可能性があることを知るべきでしょう。

## 埴生

仲皇子、不知太子不在而焚太子宮、通夜火不滅。太子、到河内國埴生坂而醒之、願望難波、見火光而大驚

先述のとおり履中記では、難波宮が燃え、履中では多遲比野で目覚めたとありますが、履中紀では太子宮が燃え、埴生坂で目覚めた

あります。

仁徳没後に住吉仲皇子の追っ手から、皇太子であった後の履中が埴生坂まで逃れたとされます。

次に、この履中紀の「埴生」の地名について考えます。

通説では、埴生といえば、大阪府羽曳野市地内に想定されています。羽曳野市には埴生野やはびきのの地名があります。履中が近畿を舞台にする天皇であれば、埴生はこの羽曳野市地内に想定されるのも頷けます。しかし、私は、これまで履中の曾祖父である仲哀、祖父である応神、父である仁徳が北部九州を舞台にした天皇であることを示してきました。であるならば、履中も北部九州を舞台にする天皇ではなかったのか、あらためて確認する必要があります。

そもそも、埴生とは、瓦・陶器の原料となるきめの細かい黄赤色の粘土のある土地のことを意味します。福岡県香椎の土壌について、『日本土壌肥科学雑誌』（Vol. 27、1956年）の358～360頁に、九州農業試験場による「福岡県香椎の頁岩に由来する赤黄色土の粘土鉱物」の研究論文があります。ここでは、香椎の第三紀層頁岩は、白、黄、緑色などのモンモリンを主とする粘土が多いことが知られ、地上風化によって急速に分解し、カオリン鉱物へ変化したと示されています。このカオリン鉱物は、岩石の風化が強く進んだ土壌に生成されているもので、陶磁器などに多く使用されています。また吸水性が高いのでテニスのクレーコートの材料にもなっています。カオリナイト（カオリン石）は本来は白色ですが、混じる鉱物の種類によって色が変化します。とりわけ酸化鉄が混じると赤色化します。

この香椎から立花山にかけては、赤黄色の粘土の地質を有する「埴生」の土地であり、「埴生」と呼ぶのに相応しいところといえましょう。

したがって、履中紀の埴生は、立花山のあたりのように思われ、立花山の裾野の斜面周辺に埴生坂があることを支持すると思いま

す。

蛇足になりますが、福岡県は北九州市を中心としてたけのこの生産が盛んです。それは、たけのこの栽培に適しているとされる粘土質の埴生の赤土だからであると考えられます。

この立花山から香椎の辺りに、埴生の地名は残っていないようですが、埴生の地名に密接に関連する「埴生神社」は、日本列島において、北部九州に集中しています。

『古事記』によれば、伊邪那美命の糞から生まれた神が波邇夜須毘古神と波邇夜須毘売神であり書紀では伊弉諾尊（伊邪那岐命）・伊弉冉尊（伊邪那美命）から、彦・姫を合わせて埴安神の一神が産れたとします。

この「埴安神」は土の神で陶磁器の祖神であり、先述のとおり、埴生は、特殊な粘土のある土地のことですから、埴生と埴安神は大いに関係があります。

この埴安神を祀る埴安神社は、次のとおり北部九州、特に福岡市に集中しており、履中紀の埴生は、北部九州、福岡市における地域性が強いと考えられます。

#### <福岡市の埴安神社>

|      |                        |
|------|------------------------|
| 埴安神社 | 福岡市南区柏原4-20-41         |
| 埴安神社 | 福岡市中央区鳥飼三丁目3-5         |
| 埴安神社 | 福岡市早良区次郎丸五丁目4-41       |
| 埴安神社 | 福岡市早良区西1614            |
| 埴安神社 | 福岡市早良区南庄3-29-13        |
| 埴安神社 | 福岡市西区今宿町260-1          |
| 埴安神社 | 福岡市西区姪の浜2-15-49, 別名探題塚 |
| 埴安神社 | 福岡市南区檜原猿田3-3 五社神社脇殿    |

#### <糸島市の埴安神社>

|      |                     |
|------|---------------------|
| 埴安神社 | 糸島市志摩野北3173         |
| 埴安神社 | 糸島市井田290, 別名三社神社    |
| 埴安神社 | 糸島市志摩野北2219, 須賀神社摂社 |

また、地祇神社の多くは、埴安神を主祭神としますが、これも、南区大橋4-8-28、南区向野2-22-1、南区塩原3-2-32、博多区竹下5-8-18など福岡市に集中しています。

このほかの埴安命を祀る神社は次のとおりであり、やはり北部九州にあります。

|         |                       |
|---------|-----------------------|
| 二宮神社    | 祭神埴安命, 西区今宿町一丁目10-32  |
| 濱地天神社   | 祭神埴安命, 糸島市志摩野北3673    |
| 埴安神社    | 祭神埴安命, 筑紫野市杉塚1-10     |
| 白木原地祿神社 | 祭神埴安命, 大野城市白木原1丁目9-17 |

さらに、書紀では、埴安神は、伊弉諾尊（伊邪那岐命）・伊弉冉尊（伊邪那美命）の二神から誕生したとされますが、新宮町ホームページの立花山の名称の由来によれば、立花山は、そのイザナミ・イザナギを祀る「<sup>ふたかみやま</sup>二神山」と呼ばれていたとありますので、埴安神すなわち埴生と立花山とは大いに結びつきがあると考えます。

なお、イザナギに関して、書紀写本には「**構**幽宮於**淡路之洲**」（**幽宮を淡路の洲に構りて**）、つまり「淡路」とあるのに対して、『古事記』写本の真福寺本には「**故其伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也**」（**伊邪那岐大神は淡海之多賀に坐すなり**）とあります。

通説では、この真福寺本の「淡海」について、近畿の近江が「近淡海」と書かれることなどから、単なる「淡海」とあるのは間違いで「淡路」の誤写であったとされますが、これは近畿を中心に考えたための誤りであろうと思います。安易な文字の改変は厳に慎むべきという考えは先師古田武彦の教えであります。真福寺本では、「近淡海」と「淡海」をしっかりと書き分けており、最古の『古事記』写本である真福寺本の記事を私は重要視すべきと考えます。

真福寺本に従えば、通説の「淡路」島ではありえません。昔の博多湾は現在の南の方の内陸部まであり淡い色の海であったと考えられますので、博多湾の「淡海」の可能性が高いと思います。「淡海」の「多賀」は福岡市南区多賀の「多賀」とするのが妥当でしょう。

したがって、イザナギも淡路島に関連するのではなく、博多湾、北部九州に関連していると考えます。

## 葛城

履中の母は、葛城襲津彦の娘の磐之媛命（石之日売命）であり、仁徳の皇后となっています。履中・反正の母です。ここでは一応、記紀に従って磐之媛命は允恭の母でもあるとしておきます。通説では、「**葛城**」といえは奈良であって、奈良の南西部にあたるとされ、現在は奈良県葛城市や大阪府岸和田市葛城町の地名がありますが、『和名類聚抄』には、大和国の「葛下郡」「葛上郡」であって、ずばり葛城の地名はないようです。

ところが、北部九州には「**葛木**<sup>加都良木</sup>」があります。『和名類聚抄』（永統的識別子info:ndljp/pid/2544220、20巻[5]18コマ）には、肥前国三根郡葛木郷が記されています。三根郡は、佐賀県にあった郡であり、佐賀県三養基郡みやき町と福岡県久留米市との間を流れる筑後川にかかる天建寺橋の北に天建寺があり、その式外社には、葛木<sup>ひとことぬし</sup>一言主神が祀られ葛城氏とのつながりが想起されます。

さらにすぐ北に葛城神社（天建寺字土居内）があり、祭神は奈良の葛城神社と同じ一言主神です。この天建寺から葛城神社の周辺一帯が葛木郷と考えられます。北部九州を本拠地に行っていた天皇が、吉野ヶ里の南に位置する、南方の地域の実力者である葛城襲津彦の娘を皇后とするのは王朝を発展させるという点でよく理解できます。

とすれば、葛城襲津彦の娘、磐之媛命が、履中・反正・允恭の母ですから、仁徳はもちろんのこと、北部九州の葛城出身の母を持つ皇子らも北部九州を本拠地に行っていた可能性は高まると思います。

## 忍海

葛城襲津彦は、神功皇后の命により、新羅の多大浦（たたらのうら、慶尚南道釜山の南）を基点に慶尚南道の梁山を攻め落として帰国します。書紀によれば、次のとおり、その捕虜は、今の桑原・高宮・忍海・佐麿（さび）の村の漢人らの先祖とされます。

是時俘人等、今桑原・佐麿・高宮・忍海、  
凡四邑漢人等之始祖也。

(神功皇后紀五年春三月)

桑原を始め、これらの村は奈良県御所市や葛城市などに比定され、『和名類聚抄』に記される大和国の葛上郡桑原郷(現・御所市池之内)、葛上郡高宮郷(現・御所市鴨神)、忍海郡(現・葛城市新庄)とされます。ただ、佐麿は『和名類聚抄』の大和国に掲載されておらず明らかではないようですが、佐麿は、河内国石川郡佐備(現・大阪府富田林市佐備)ではないかと私は思います。というのも葛城山の東に桑原・高宮・忍海があり、西側に佐麿があったとすれば、これらの4つの村が大和と河内の境にある葛城山を中心にその麓にある東西の村々であると理解できます。

なお、河内国石川郡佐備は『和名類聚抄』に記された郷名です。

しかし、これらの村は神功皇后紀の記述にあるように、葛城襲津彦が活躍した四世紀末当時存在した村々のことではなく、書紀編纂の八世紀初めの「今」の地名です。かつて朝鮮半島から捕虜として渡った漢人は、「今」、近畿の葛城山の麓の村々に住んでいる漢人の祖先であると記しているのです。この近畿の葛城山の麓の村々に漢人が住みつく前の経過については記されていません。つまり、今の漢人の住まいが近畿の葛城であったとしても、四世紀の葛城襲津彦の本拠地が近畿にあったことにはならないのです。この点に十分注意する必要があります。

一方、『肥前国風土記』の三根郡の条には物部・漢部・米多の三郷があり、漢部郷の項に次のとおり記されます。

**漢部郷 在郡北**

**昔者来目皇子為征伐新羅 勒忍海漢人將  
来居此村 令造兵器因曰漢部郷**

下線部で示したように、この『肥前国風土記』の記事に、忍海の漢人が記されています。来目皇子(～603年)が新羅征伐の為に忍海の漢人をこの漢部の村に住まわせ、兵器を作

らせたと記されます。一般的には、この来目皇子が連れてきた忍海の漢人は、神功皇后紀の記事にある忍海の漢人、つまり近畿の葛城山の麓、忍海から来たと考えられていると思います。

いうまでもなく、来目皇子の新羅征伐計画は七世紀初め(602年)であり、書紀編纂時より一世紀以上前の時代です。その七世紀に近畿の忍海に漢人が住んでいたのかどうか、また、その村がすでに忍海と呼ばれていたのかどうかはわかりません。あくまで書紀の忍海は八世紀始めの時点の地名であって、この七世紀初めについての確証は何もありません。

新羅征伐のための武器製造の技術者として、忍海の漢人を「勒」すなわち調達したのですから、近畿の漢人とは限りません。そうであるかもしれませんが、そうでないかもしれません。可能性だけで言えば、来目皇子が連れてきた漢人は、朝鮮半島の国の漢人の可能性もあります。

というのも『隋書』百濟伝には「其人雜有新羅、高麗、倭等、亦有中國人。」(百濟の人は新羅、高句麗、倭などが混在して、また中国人もいる。)という記事があります。倭の新羅征伐の7世紀当時、百濟には、複数の民族が一緒に住んでおり、漢人もいたとされます。7世紀には百濟に漢人がいたと文献によって確認でき、『肥前国風土記』の忍海の漢人は、新羅に対抗する百濟の漢人であった可能性が考えられます。

その「忍海」について具体的に想定すれば、「忍海」と同じ読みである現在の大韓民国の「押海」であろうと思います。朝鮮半島南西部の全羅南道新安郡の島に押海(압해)邑があります。ここは元々、百濟の領地で、その後新羅の領地となっています。

「押海」について、『三国史記』では、新羅の第35代の景德王(在位742年～765年)が元は百濟の阿次山郡であった地名を「壓海(圧海)郡」に改めたとされ、また『朝鮮王朝実録』では、世宗(李氏朝鮮第4代国王、在位1422年～1497年)の実録に元は百濟の阿次山

縣であつたところを新羅が「押海郡」に改めたとあり、これは高麗初の帰属とあります。

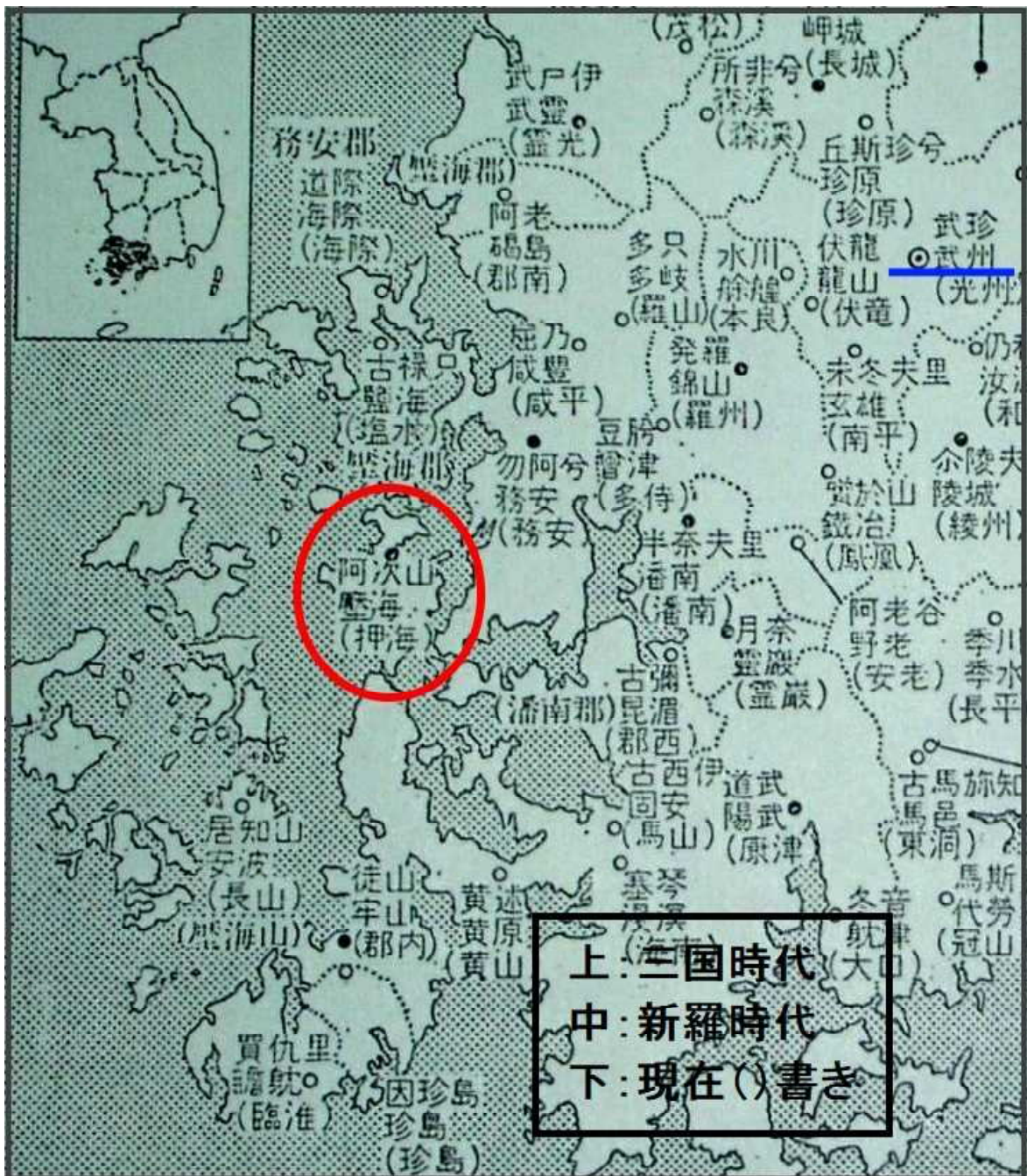
**押海、本百濟阿次山縣、新羅改押海郡、高麗初、來屬。**

(『朝鮮王朝實錄』の世宗實錄／地理志全羅道／羅州牧、10-1頁)

旧百濟の地に「壓海（圧海）」又は「押海」と呼ばれた地域があつたのです。『三国史記』や『朝鮮王朝實錄』では、新羅の王が百濟の地名阿次山を押海に変更したと記されています。なぜ阿次山を押海に地名変更したのかわ

かりませんが、百濟の地になる前の元の呼び名が押海であつたからではないかと思ひます。つまり、現在の大韓民国の「押海」の地域を、新羅では「壓海（圧海）」や「押海」と呼んだのは、倭が同地を「忍海」と呼んでいたからではないかと思われるのです。朝鮮半島の南西部は、かつて倭の任那があつたところ です。

来目皇子は、朝鮮半島の「忍海」から漢人の技術者を調達した可能性を否定できないだろうと思ひます。



出典：『三国史記 3』（金富軾著・井上秀雄翻訳、平凡社、1986年、東洋文庫新書）、マーク等は筆者追記。

来目皇子は、武器づくりのために漢人を百済から九州に連れてきて、肥前国三根郡の漢部郷<sup>あやべ</sup>に住ませ、そこで武器製造<sup>あやべ</sup>にあたらせたのではないのでしょうか。その漢部郷は、現在の佐賀県三養基郡みやき町原古賀綾部<sup>あやべ</sup>とされます。すなわち、忍海は、朝鮮半島の地であった可能性があり、近畿の葛城の忍海に限られるものではないと考えます。

なお、河内国埴生山の岡上に葬られたとされる来目皇子の墳墓<sup>おみわじんじや</sup>は、通説では大阪府羽曳野市はびきの3丁目の塚穴古墳（一辺約53m方墳）に比定されていますが、私は、博多の河内の「埴生」の山である立花山の麓の岡に埋葬されたのではないかと考えています。

現在、立花山の麓にある高美台には、4群9基<sup>おみわじんじや</sup>の古墳群が確認されています。このうち大神神社（福岡市東区高美台二丁目24番1号）の拝殿の左に天井石が露出している1号墳があり、馬具、直刀、鍬が発見されており武人の墳墓と思われます。御由緒には「神功皇后御征朝の節、大和の将兵此の地に駐屯の折勸請したるものと伝う。」とあり、ここが来目皇子の墳墓の候補地のひとつに相応しいのではないかと思います。ひょっとすると、この古墳のほかにもっと来目皇子の古墳として妥当なものがあつたかもしれません。しかし、その他の8基の多くは原形をとどめておらず詳細もわからない状況です。

以上のように、履中にまつわる地名は、北部九州に存在しており、近畿にそれらの地名を比定しようとするのは、仲哀を始め応神、仁徳、仲哀が近畿の天皇であるとする思い込みがあるからではないかと思います。

それらは、書紀編者が、とにかくにも巨大古墳の存在を重視するところから始まっており、天皇はこれらの巨大古墳のある近畿にいたに違いないとする書紀編者の思考によるものだと思います。

まっさらな所から思考を始めると、これらの天皇は北部九州にいた可能性が見えてくるのです。

## 古代逸年号 (白雉年号の重複) —古代史覚書帳—

瀬戸市 林 伸禧

先に発表しているとおり、古代逸年号は、第Ⅰ系年号と第Ⅱ系年号に類型区分されるが、その重複事例が『箕面寺秘密縁起』にあったと判明したので報告する。

孝徳天皇御宇、白雉元年<sup>庚戌</sup> 歳次壬子 冬十月十七日、摘樗花、備供具、酌闕伽、

其闕伽 井行者秘 所隨水在西峯也 敬遂開眼供養給也

（山岳宗教研究叢書18『修験道史料〔Ⅱ〕—西日本編』277頁）

「白雉元年<sup>庚戌</sup> 歳次壬子」の記事は、白雉元年に「庚戌」と「壬子」の2つの干支が記述されている。すなわち、次の二通りである

- ・白雉元年庚戌
- ・白雉元年壬子

ここでは、第Ⅰ系年号である「白雉元年壬子」と、第Ⅱ系年号の「白雉元年庚戌」が併せて記述されている。『箕面寺秘密縁起』の著者は、この作成時に用いた参考文献に、第Ⅰ系年号の「白雉元年壬子」が掲載されていたため、そのまま記載したものの、これを誤りと思い、『日本書紀』の年号である白雉元年の干支である庚戌を小さく追記した。ただし、参考文献の干支である壬子を削除するのに抵抗があつたので、その記事を尊重して、そのまま残したと思われる。要するに、『箕面寺秘密縁起』の著者は、第Ⅱ系年号しか承知していなかったのである。

以上は巻一の事例であるが、巻二においても同様に、次のとおり第Ⅰ系年号と第Ⅱ系年号の重複記事があり、『箕面寺秘密縁起』の著者は、第Ⅱ系年号しか承知していなかったと思われる。

孝徳天皇御宇、白雉元年<sup>庚戌</sup> 歳次壬子 春三月十七日、尋五色雲、求三鉈杵、到當山坂本、  
.....

# 九州菊池川流域の人々

一宮市 畑田寿一

狗奴国は卑弥呼の率いる邪馬台国に属せず独自の道を歩いて発展してきたと言われているが、4世紀後半になると有明海連合の中核として中国、朝鮮半島との交易を代表するまでに至った。

その中で菊池川流域は早くから稲作が始まり、経済・文化の中心として発展し、全国で657基ある装飾古墳が菊池川流域だけでチブサン古墳を始め117基を数えている。

この地域は百済の文化が色濃く残る特色があるが、朝鮮半島との交流の足跡を追うことで狗奴国の実態を追ってみたい。

< 菊池川水系 >



## 1 菊池盆地の成り立ち

### (1) 茂賀の浦

9万年前の阿蘇山の4回目の噴火により、菊池川の上流が現在の山鹿市付近でせき止められ古代湖が形成された。これが茂賀の浦である。縄文遺跡のある箇所標高から縄文時代には標高45m付近が湖面になっていたと想定されている。その後、せき止められていた箇所が徐々に侵食され湖が干上がると、弥生時代には肥沃で広大な菊池盆地が現れた。

## (2) 方保田東原遺跡

干上がった菊池盆地には3世紀頃から人が住み着き広大な集落を形成した。現在発掘されている範囲でも100棟以上の住宅が発見されており、最終的には35haを越えると考えられ、吉野ヶ里遺跡に匹敵すると言われている。また、鉄器の出土も500点を越え、隣の白川水系の狩尾遺跡での製鉄遺跡から見ても、製鉄が行われていた可能性は高い(拙稿「東海の古代」206号)。

方保田東原遺跡の南隣の西弥護免遺跡(弥生時代)の鉄器の成分分析の結果、バナジウムの含有量が朝鮮半島の鉄器に比べて高く、国産であることを示すとする論文も発表されている(新井宏氏・元韓国慶尚大学教授、2009年)。

そのほか、山陰、近畿の土器などが出土し、交易の広さを窺わせるとともに、巴型銅器、朱塗りの壺など祭司に必要な道具も揃っている。更に上流の菊池市にも環濠を持つ大規模集落が2つ発見されており、卑弥呼の時代から菊池盆地は狗奴国の中心地であった。

## 2 江田船山古墳

菊池川の中流の和水町に江田船山古墳がある。構築は5世紀後半で古墳のサイズは46m程度であるが、副葬品の豪華さは飛び抜けており、特に銘入り鉄剣はこの古墳を一躍有名にした。古墳は菊池川沿いの高台に位置しており清原古墳群と呼ばれている。

### (1) 付近の古墳

江田船山古墳の付近には、塚坊主古墳(44m, 5世紀前半)、船山古墳(58m, 5世紀後半)、虚空蔵塚古墳(58m, 6世紀前半)がある。また、菊池川の北側の台地には若宮古墳(30m, 古墳時代中期)江田穴観音古墳(17m, 7世紀前半)などがあり、比較的狭い地域であるが、継続して繁栄していたことが窺われる。

出土品も馬具や金環など江田船山古墳と同じような品が多いことから一連の氏族の墓と考えられる。

## (2) トンカラリン

江田船山古墳の付近の山の裾野から暗渠が引かれている。この用途は宗教施設説（菊地川流域文化財調査報告書（熊本県教育委員会 2016年、107頁）が有力であるが、他に類似の施設が見当たらないことから説得性に欠ける。この地域は阿蘇山の4回目の噴火時の火砕流に覆われており、火砕流と従来の地層との間に伏流水の通り道ができ、各所に湧水池ができています。この施設は明らかに伏流水を引き込んだ上水路で、水路の最後は滝になっており滝壺には小さな池と中央に丸い石が置かれている。その先の水路が見つからないが、江田船山古墳の環壕に水を供給していたのではなかろうか。

いずれかの時期に伏流水の流れが変わり水が枯れ、その結果、この地点が放置されたのではないかと。上流の地域では条里制の跡がみられるが、この地点では見られないことから、その時期は8世紀頃と考えられる。

## (3) 江田船山古墳の副葬品

副葬品の特徴は夥しい量の中国、朝鮮半島製と思われる品々である。

主なものを列記すると次のとおり。

| 種 類   | 数     |
|-------|-------|
| 刀剣類   | 2 3 本 |
| 銅鏡    | 6 面   |
| 玉類    | 3 1 箇 |
| 金環    | 1 対   |
| 耳飾    | 2 対   |
| 冠帽履類他 | 1 3 箇 |
| 甲冑類   | 4 領   |

冠、履については百済武寧王の墳墓から出土したものに酷似している。また、忠清南道公州の水村里(スチョンリ)遺跡からの出土品とも類似性がある。これらの品は買い求めが困難と思われるので大王からの下賜品と考えるのが妥当であろう。因みに水村里遺跡の被葬者は地方の首長とされている（出典：朝鮮日報、2005年）。

## (4) 江田船山古墳の被葬者

通説では、出土した鉄剣銘を「**天の下治らしめし獲□□□齒大王の世、典曹に奉事せし人、名は無利豆・・**」（江田船山国宝展実行委員会「江田船山国宝展」、2001年）と解釈して、「ワカタケル」＝「雄略天皇」の時代に「ムリテ」が自分で作って埋葬したとしている。しかし興味深い説を唱える研究者が現れた。江口素里奈氏は、自著『江田船山古墳鉄剣銘の秘密』（五月書房、2007年）の中で『「**獲**」としている字は「復」である。』とする説を唱え、ワカタケルでなく百済の蓋齒大王説を主張している。

＜刀剣銘比較＞



左 江田船山古墳（e-国宝）

右 稲荷山古墳（東京文化財研究所）

「復」の左側のギョウニンベンには少し違和感がある。縦の棒は上まで突き抜けており象嵌では線が外れることであっても追加されることは無い。「復」は言われてみればそのようにも見える。明らかに「獲」ではない。実は現在の「ワカタケル」説の前には「**牙復□□□齒大王**」と読み、多遲比弥都齒大王（反正天皇）にあてる説が有力であった（出典：Wikipedia）。ただ「牙復」は日本最大の大漢和辞典（棚橋編）になく読み方は不明である。意味は「復」側にあると思われるので「よみがえる・復興」の意味であろう。「齒」は明らかに「歯」ではない。従って反正天皇とする説は否定的である。

## (ア) 官吏の名称

職能別官僚を「人」を付けて呼ぶ方法は「**人制**」と呼び、5世紀後半からあったとする説を直木孝次郎氏が国史大辞典 11（吉川

弘文館)で述べており、これが通説となっている。氏は「人」は下級豪族と位置づけており、「ムリテ」も同様と考えることになる。

職能別官僚名は中国の後漢時代に始まっており、宋(南朝)には細分化と共に制度自体が完成したと考えられている。中国では一貫して「曹」の文字を使っており、『後漢書』巻114(台湾維基文庫)志24・百官の条によれば給料の格差が20倍に及んでおり、相当高い地位から実務担当者までが含まれていた。

### (イ) 被葬者の推察

鉄剣銘を最近の朝鮮半島での出土結果を踏まえて再度可能性のある説を検証してみたい。

#### <説1> 被葬者は倭人で鉄剣は地方の役人(典曹人)であったムリテが自分で作った。

この説は現在主流となっている。しかし、百済の王から冠を貰う程の人物が大和王朝から下級豪族と認められた記念に太刀を造るだろうか。少し話しが違ふと思われる。

#### <説2> 被葬者は倭人で中央の役人(典曹人)であったムリテから鉄剣を貰った。

被葬者は少なくともムリテより下の階級にあり、この説は<説1>より可能性が更に低い。

#### <説3> 被葬者は百済人で百済の賞典局のような部署(長官:ムリテ)から他の品と併せて貰った。

この場合、典曹人を倭国の人制と違う体系を想定する必要があるが、百済には該当する記録が無い。高句麗では職能別官僚を「典」と呼んでおり、これには相当上下の幅がある。458年に蓋鹵王が部下の11名の諸侯に対する除正を宋(南朝)に求めている(『宋書』巻97百済伝)が、そのとき被葬者も対象なり、前述の水村里遺跡の被葬者と共に中央から貰ったとも考えられる。

ただし、この説を確かなものにするには朝鮮半島から同様の太刀が出土する必要がある

が、今のところ見つかっていない。

#### <説4> 被葬者は百済人で外交の専門家(曹典)であり名前はムリテである。今回除正を受けたので記念に太刀を造った。

これはありそうであるが、刀の銘に書き込む内容が違うような気がする。

以上のような観点から「天の下治らしめし復興百済蓋鹵王の世・・・」と読み、説3を採用するのが妥当であろう。

### 3 塚原古墳(玉名市)

塚原古墳は、菊地川の下流に位置しており、この地点まで海岸線が迫っていたと考えられる。

遺跡からは円形の大型建物遺跡が発掘されており、海上交易の中継点であった。

### 4 装飾古墳

装飾古墳は4世紀後半から7世紀にかけて造られ、菊地川流域は6世紀前後のものが多い。

文様のルーツについては諸説あるが、文様の意味するところは道教の宇宙観にあり、宗教観も同様であることには異論はない。

| 地方     | 装飾古墳の県別箇所数                            |
|--------|---------------------------------------|
| 九州 9 1 | 福岡 3 6、佐賀 1 0、長崎 5、熊本 2 6、大分 1 3、宮崎 1 |
| 山陰 4 8 | 鳥取 3 9、島根 9                           |
| 北陸 4   | 福井 4                                  |
| 山陽 9   | 岡山 2、香川 7                             |
| 近畿 1 3 | 兵庫 7、大阪 4、奈良 1、和歌山 1                  |
| 中部 6   | 静岡 4、長野 1、山梨 1                        |
| 関東 4 1 | 神奈川 2 0、東京 1、千葉 5、埼玉 1、茨城 1 4         |
| 東北 3 1 | 福島 1 9、宮城 1 2                         |
| 計      | 2 3 7 箇所                              |

(注1) 群は1として数える

(注2) 出典: 相原精次・三橋浩『東北古墳探訪』彩流社、2009年、13ページ

国内の装飾古墳の分布を調べてみると、  
①日下氏（阿部氏末裔）＝大彦命（関東地方）、  
②多氏＝神八井耳命（九州北部、中部）、  
③海部氏＝火明命（日本海、太平洋沿い）  
の3種類に大別できる。

これは九州にいた氏族が地方に移動していった痕跡を示しているのではないか。最初に多氏があり、これが日下氏、海部氏に伝播して各々の氏族の交流に併せて装飾古墳が作られていったと思われる。不思議なのは近畿・尾張に装飾古墳が少ないことで、多氏には2系統あり、近畿・尾張の系列と違うという説もあるが、海部氏についての説明が付かない。近畿・尾張では伊勢神宮系の宮が広がりつつあった時期でもあり、新しい宗教観と宗教行事の普及により道教が取って代われ、これが近畿・尾張に装飾古墳が少ない理由かもしれない。

## 5 まとめ

狗奴国の位置については諸説あるが、熊本県内とする説が最も有力である。その中で最大の遺跡・古墳は菊地盆地にあり、3世紀まで遡る古墳は無いが、『魏誌』倭人伝で狗奴国を率いる者を「**狗古智卑狗**」としており、菊地の古代読み「くくち」に通じることや、熊本県南部の緑川流域の塚原古墳群も4世紀後半までしか遡れないので、卑弥呼の時代の狗奴国の中心は菊地盆地と考えてよいのではなかろうか。

5世紀になり、江田船山古墳のある清原台地は副都心的な役割をしていたが、被葬者は明らかに百済人であり、朝鮮半島の任那に倭人の居留地が在ったように百済人が在留していたと思われる。ただし、朝鮮語と思われる地名が少ないので狗奴国を支配していたとは考え難い。朝鮮半島・中国との交易には深く関わっていたと思われるので、中国（南宋）から倭国を代表する外交官的扱いを受けていた可能性がある。

百済王朝に繋がる者とする意見もあるが、下賜された刀剣の銘に「**子孫洋々・不失其所統**」（子孫は（百済の）所有地を失わない）の記述があるように、百済王朝から末代までの身分が保障されていることから、むしろ、

百済の有力諸侯の1人と考える方が妥当で、百済王朝と深く関わっていた。

6世紀に入ると装飾古墳の構築が盛んになり、この地方出身者の交易を通じて日本各地に装飾古墳が作られるようになった。有明海連合の活躍が覗かれる出来事であろう。

7世紀の白村江の戦いで倭国が破れ、唐軍の侵攻に備えるため大宰府付近に水城などを構築したが、その中で鞠智城は後方支援のために構築されたとする説が一般的である。しかし、神護石（砦）の配置を眺めてみると倭国は博多湾と有明海の双方からの侵略を想定しており、城の規模から見ても主戦場を有明海と見ていた可能性がある。

## 天智天皇の即位年

瀬戸市 林 伸禧

### 1 天智の即位年

『日本書紀』天智天皇の即位記事は、次のとおりであり、天智七年正月に即位したとあるとともに、或本曰くとして異説で六年三月に即位したと記述している。

**七年春正月丙戌朔戊子**

**皇太子即天皇位** 或本云「六年歲次丁卯三月 即位」

また、注釈書の天智六年三月条に、近江遷都が記されている。

**三月辛酉朔己卯 遷都于近江**

この注釈書では、異説について、表1のとおりに遷都した年のことであるとされる。つまり、論外に異説の即位は誤りとする。

この解釈には、次の点で疑問がある。

(1) 或本は天智六年三月に即位したと述べている。すなわち『日本書紀』以外の文献では、そのように記述されていたから或本曰くとして記述したと理解すべきである。

(2) 天智は称制として最高実力者であっても天皇ではない。天皇ではない天智に“遷都”の語句が本来使用出来るとは思えない。

(3) 継体紀以降の即位と遷都記事を抜き書きすると、表2のとおりであり、異説の天智六年に即位したとすれば、同時期に遷都したことになり整合がとれる。

①即位後遷都：継体、安閑、宣化、欽明、孝徳

②即位後遷居：崇峻、推古、舒明、皇極、  
齊明、天武、持統

③即位前遷都：天智

④記述なし：敏達、用明

表1 即位記事の細字記事に対する注釈

| 注釈書      | 解 説                                                              |
|----------|------------------------------------------------------------------|
| 日本古典文学大系 | 六年三月は、遷都の年。帝紀では帝都と即位とをすぐ続けて記す。この或本も帝紀ふうな書き方をしたのであろう。『日本書紀』下、367頁 |
| 日本古典文学全集 | 六年三月は、遷都の年。『日本書紀』③、274頁                                          |

表2 天皇の即位及び遷都記事

| 区 分 | 即位記事                                               | 遷都記事                                                                                                       |
|-----|----------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2 6 | 継体<br>継体元年二月辛卯朔甲午<br>是日 則天皇位                       | 継体五年冬十月 <b>遷都</b> 山背筒城<br>十二年春三月丙辰朔甲子 <b>遷都</b> 弟國<br>廿年秋九月丁酉朔己酉 <b>遷都</b> 磐余玉穗 <small>一本云<br/>七年也</small> |
| 2 7 | 安閑<br>継体廿五年春二月辛丑朔丁未<br>男大迹天皇 立大兄爲天皇                | 安閑元年元年春正月<br><b>遷都</b> 于大倭國勾金橋 因爲宮号                                                                        |
| 2 8 | 宣化<br>安閑二年十二月<br>是天皇爲人 器宇清通 神襟朗邁<br>不以才地 矜人爲王 君子所服 | 宣化元年元年春正月<br><b>遷都</b> 于檜隈廬入野 因爲宮号也                                                                        |
| 2 9 | 欽明<br>宣化四年冬十二月庚辰朔甲申<br>天國排開広庭皇子 即天皇位               | 欽明元年秋七月丙子朔己丑<br><b>遷都</b> 倭國磯城郡磯城嶋 仍号磯城嶋金刺宮                                                                |
| 3 0 | 敏達<br>敏達元年四月壬申朔甲戌<br>皇太子即天皇位                       | 記述なし                                                                                                       |
| 3 1 | 用明<br>敏達十四年九月甲寅朔戊午<br>天皇即天皇位 宮於磐余 名曰池辺雙槻宮          | 記述なし                                                                                                       |
| 3 2 | 崇峻<br>用明二年八月癸卯朔甲辰<br>炊屋姫尊與群臣 勸進天皇 即天皇之位            | 是月 宮於倉梯                                                                                                    |
| 3 3 | 推古<br>崇峻五年冬十二月壬申朔己卯<br>皇后即天皇位於豐浦宮                  | 推古十一年冬十月己巳朔壬申<br><b>遷</b> 于小墾田宮                                                                            |
| 3 4 | 舒明<br>舒明元年春正月癸卯朔丙午<br>即日 即天皇位                      | 舒明二年冬十月壬辰朔癸卯<br>天皇 <b>遷</b> 於飛鳥岡傍 是謂岡本宮<br>舒明八年六月<br>災岡本宮 天皇 <b>遷居</b> 田中宮                                 |
| 3 5 | 皇極<br>皇極元年春正月丁巳朔辛未<br>皇后即天皇位                       | 皇極元年十二月壬午朔壬寅 (二十一日)<br>是日 天皇 <b>遷移</b> 於小墾田宮 <small>或本云 遷於東<br/>宮南庭之權宮</small>                             |
| 3 6 | 孝徳<br>皇極四年六月丁酉庚戌<br>由是 輕皇子 不得固辞 升壇即祚               | 大化元年冬十二月乙未朔癸卯<br>天皇 <b>遷都</b> 難波長柄豐碯<br>白雉五年十二月壬寅朔己酉<br>是日 皇太子 奉皇祖母尊 <b>遷居</b> 倭河辺行宮                       |
| 3 7 | 齊明<br>齊明元年春正月壬申朔甲戌<br>皇祖母尊 即天皇位 於飛鳥板蓋宮             | 齊明元年是冬<br>災飛鳥板蓋宮 故 <b>遷居</b> 飛鳥川原宮                                                                         |
| 3 8 | 天智<br>七年春正月丙戌朔戊子 皇太子即天皇位<br>或本云「六年歲次丁卯三月 即位」       | <sup>19日</sup><br>天智六年三月辛酉朔己卯<br><b>遷都</b> 于近江                                                             |
| 3 9 | 天武<br>二月丁巳朔癸未<br>天皇 …… 即帝位於飛鳥淨御原宮                  | 天武元年即冬<br><b>遷以居焉</b> 是謂「飛鳥淨御原宮、                                                                           |
| 4 0 | 持統<br>四年春正月戊寅朔<br>皇后即天皇位                           | 持統八年十二月庚戌朔乙卯<br><b>遷居</b> 藤原宮                                                                              |

2 一年遡った記事

(1) 高安城の築城記事

天智天皇六年十一月条に次の記事がある。築城記事から1年遡っている。

是月 築倭國 高安城 讚吉國山田郡屋 二年八月丁未 修理高安城 天智天皇五年築城也  
島城 対馬國金田城

(2) 『万葉集』の朱鳥年号記事

これに対して『続日本紀』の文武天皇二年 表3のとおり、一年遡っている。

表3 『万葉集』・『日本書紀』記事対比表

| 西 暦 | 和 暦 | 日本書紀（持統紀）                                                                                               | 古代逸年号 | 万 葉 集                                                                                                      |
|-----|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 686 | 丙戌  | 朱鳥 元 天武十五年七月己亥朔戊午 改元曰朱鳥元年                                                                               | 朱鳥 元  |                                                                                                            |
| 687 | 丁亥  | 持統 元                                                                                                    | 二     |                                                                                                            |
| 688 | 戊子  | 二                                                                                                       | 三     |                                                                                                            |
| 689 | 己丑  | 三                                                                                                       | 四     | 日本紀曰 朱鳥四年庚寅秋九月天皇幸紀伊国也                                                                                      |
| 690 | 庚寅  | 四 四年春正月戊寅朔 皇后即天皇位 持統四年九月乙巳朔丁亥 天皇幸紀伊                                                                     | 五     | 日本紀云 朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑 淨大參皇子川嶋 薨                                                                              |
| 691 | 辛卯  | 五 持統五年九月己巳朔丁丑 淨大參皇子川嶋薨                                                                                  | 六     | 右日本紀曰 朱鳥六年壬辰 春三月丙寅朔戊辰 以淨広肆 広瀬王等等 為留守官 於是、中納言大三輪朝臣高市麻呂 脱其冠位 擎上於朝 重諫曰「農作之節、車駕未可以動」 天皇 不從諫 遂幸伊勢 五月乙丑朔庚午 御阿胡行宮 |
| 692 | 壬辰  | 六 持統六年 三月丙寅朔戊辰 以淨広肆 広瀬王 … 為留守官於是、中納言大三輪朝臣高市麻呂 脱其冠位 擎上於朝 重諫曰「農作之節、車駕未可以動」 辛未 天皇 不從諫 遂幸伊勢 五月乙丑朔庚午 御阿胡行宮…… | 七     | 右日本紀曰 朱鳥七年癸巳秋八月幸藤原宮地                                                                                       |
| 693 | 癸巳  | 七                                                                                                       | 八     | 八年甲午春正月 幸 藤原宮 冬十二月庚戌朔乙卯 遷居 藤原宮                                                                             |
| 694 | 甲午  | 八 持統八年春正月乙酉朔乙巳 幸 藤原宮 冬十二月庚戌朔乙卯 遷居 藤原宮                                                                   | 九     |                                                                                                            |
| 695 | 乙未  | 九                                                                                                       | 十     |                                                                                                            |
| 696 | 丙申  | 十                                                                                                       | 十一    |                                                                                                            |

※1 『万葉集』 卷一（三四、四四、五〇番）、卷二（一九五番）  
2 『万葉集』：日本古典文学全集『万葉集』①  
3 『日本書紀』：日本古典文学大系『日本書紀』下

(3) 白村江の戦い時期

表4のとおり、『日本書紀』・『新唐書』本紀、『三国史記』新羅本紀と『旧・新唐書』百濟伝・『三国史記』百濟本記には一年の差がある。

（『日本書紀』記事から一年遡っている。）

われる。その暦が百濟、九州王朝に用いられたと推定するが、さらに検討を要する。

なお、一年遡ったことを記す論考としては、次が参考となる。

- 古田武彦「虹の光輪」（『多元』28号、1998年10月）
- 古賀達也「1年ずれ問題の史料批判」（『古田史学会報』31号、1999年4月）

(4) 考察

これらから、一年遡った暦が存在したと思

表 4

白村江の戦い年次

| 区 分  | 史 書  | 6 6 2 年             | 6 6 3 年             | 備 考                    |
|------|------|---------------------|---------------------|------------------------|
| 日本史書 | 日本書紀 | —                   | 天智紀<br>天智二年八月壬午朔戊申  |                        |
| 中国史書 | 旧唐書  | 列伝(東夷一百濟)<br>龍朔二年七月 | —                   | 列伝(劉仁軌)では、時期が特定されていない。 |
|      | 新唐書  | 列伝(東夷一百濟)<br>龍朔二年七月 | 本紀(高宗紀)<br>龍朔三年九月戊午 |                        |
| 朝鮮史書 | 三国史記 | 百濟本紀<br>龍朔二年七月      | 新羅本紀<br>龍朔三年        |                        |

平成 2 9 年「東海の古代」(197号～200号) 目録

| 号数  | 発行年月   | 分 類 | 表 題                              | 連載回数 | 頁  | 著 者        | 備 考   |
|-----|--------|-----|----------------------------------|------|----|------------|-------|
| 197 | 29年 1月 | 論 考 | 年頭のあいさつ                          |      | 1  | 会長<br>竹内 強 |       |
|     |        |     | 「東鯉人」を考える                        |      | 2  | 竹嶋正雄       |       |
|     |        |     | 九州古代史探訪旅行                        | 2    | 7  | 山田 裕       |       |
|     |        |     | 倭人の二倍年暦と暦                        |      | 10 | 佐藤章司       |       |
|     |        | ひろば | 私が投げかける問題                        | 2    | 11 | 石田敬一       |       |
| 198 | 29年 2月 | 論 考 | 九州古代史探訪旅行                        | 3    | 1  | 山田 裕       |       |
|     |        |     | 韓国内陸行と持衰と生口 <sup>じさい</sup>       |      | 2  | 佐藤章司       |       |
|     |        |     | ハツクニシラス 天皇 <sup>スメラミコト</sup> の考察 |      | 5  | 竹嶋正雄       |       |
|     |        |     | 知多半島の塩からみる律令時代の租税制度の実態と考察        |      | 9  | 畑田寿一       |       |
|     |        | ひろば | 私が投げかける問題                        | 3    | 11 | 石田敬一       |       |
| 199 | 29年 3月 | 論 考 | 『房総叢書』から見えるもの                    |      | 1  | 林 伸禧       | 別紙1～3 |
|     |        |     | 美濃国からみた壬申の乱                      |      | 2  | 畑田寿一       |       |
|     |        |     | 神武天皇と崇神天皇は同一人物                   |      | 5  | 竹嶋正雄       |       |
|     |        |     | 九州古代史探訪旅行                        | 4    | 10 | 山田 裕       |       |
|     |        |     | 常世国と高天原と天国 <sup>あまこく</sup>       | 1    | 12 | 佐藤章司       |       |
|     |        | ひろば | 生口について一言                         |      | 15 | 石田敬一       |       |
| 200 | 29年 4月 | 論 考 | 古代逸年号掲載文献一覧                      |      | 1  | 林 伸禧       | 別表1・2 |
|     |        |     | 常世国と高天原と天国 <sup>あまこく</sup>       | 2    | 9  | 佐藤章司       |       |
|     |        |     | 九州古代史探訪旅行                        | 5    | 12 | 山田 裕       |       |
|     |        |     | 日本への暦の伝来を探る                      |      | 13 | 林 伸禧       |       |
|     |        | ひろば | 年紀について一言                         |      | 15 | 石田敬一       |       |

平成29年「東海の古代」（201号～208号）目録

| 号数  | 発行年月   | 分 類 | 表 題                        | 連載回数 | 頁  | 著 者  | 備 考                                     |
|-----|--------|-----|----------------------------|------|----|------|-----------------------------------------|
| 201 | 29年 5月 | 論 考 | 九州古代史探訪旅行                  | 6    | 1  | 山田 裕 |                                         |
|     |        |     | 『新唐書』を読み直す                 |      | 3  | 畑田寿一 |                                         |
|     |        |     | 天孫・皇孫降臨と邪馬壹國               | 1    | 6  | 竹嶋正雄 |                                         |
|     |        |     | 倭の五王 ―『宋書』の倭國―             | 1    | 8  | 石田敬一 |                                         |
|     |        |     | 『北鑑』倭国年号                   |      | 14 | 林 伸禧 |                                         |
| 202 | 29年 6月 | 論 考 | 持統天皇の行幸                    |      | 1  | 畑田寿一 |                                         |
|     |        |     | 九州古代史探訪旅行                  | 7    | 3  | 山田 裕 |                                         |
|     |        |     | 倭の五王 ―『宋書』の倭國―             | 2    | 4  | 石田敬一 |                                         |
|     |        |     | 『会津正統記』と古代逸年号              |      | 6  | 林 伸禧 |                                         |
| 203 | 29年 7月 | 論 考 | 天孫・皇孫降臨と邪馬壹國               | 2    | 1  | 竹嶋正雄 |                                         |
|     |        |     | 倭の五王 ―『宋書』の倭國―             | 3    | 5  | 石田敬一 |                                         |
| 204 | 29年 8月 | 報 告 | 愛知サマーセミナーの結果など             |      | 1  | 石田敬一 |                                         |
|     |        | 論 考 | 宣下天皇期の大和王朝屯倉から九州への粳の移送     |      | 3  | 畑田寿一 |                                         |
|     |        |     | 『運歩色葉集』における古代逸年号           | 1    | 5  | 林 伸禧 |                                         |
|     |        |     | 倭の五王 ―『宋書』の倭國―             | 4    | 9  | 石田敬一 |                                         |
| 205 | 29年 9月 | 報 告 | 愛知サマーセミナーの感想文              |      | 1  | 石田敬一 |                                         |
|     |        | 論 考 | 『記・紀』神話と倭国                 |      | 2  | 竹嶋正雄 |                                         |
|     |        |     | 倭の五王 ―『宋書』の倭國―             | 5    | 6  | 石田敬一 |                                         |
| 206 | 29年10月 | 論 考 | 景行紀と倭国                     |      | 1  | 竹嶋正雄 |                                         |
|     |        |     | 阿蘇の狩尾遺跡での製鉄                |      | 3  | 畑田寿一 |                                         |
|     |        |     | 倭の五王 ―『宋書』の倭國―             | 6    | 6  | 石田敬一 |                                         |
| 207 | 29年11月 | 論 考 | 『日本書紀』年表4                  |      | 1  | 林 伸禧 | ・『日本書紀』年表四<br>・古代逸年号文献目録<br>(暫定・個別逸年号編) |
|     |        |     | 神武天皇の東征を遺跡から探る             |      | 3  | 畑田寿一 |                                         |
|     |        |     | 倭の五王 ―『宋書』の倭國―             | 7    | 6  | 石田敬一 |                                         |
| 208 | 29年12月 | 論 考 | 倭の五王 ―『宋書』の倭國―             | 8    | 1  | 石田敬一 |                                         |
|     |        |     | 古代逸年号（白雉年号の重複）<br>―古代史覚書帳― |      | 7  | 林 伸禧 |                                         |
|     |        |     | 九州菊池川流域の人々                 |      | 8  | 畑田寿一 |                                         |
|     |        |     | 天智天皇の即位年                   |      | 11 | 林 伸禧 |                                         |
|     |        | ひろば | 大相撲について一言                  |      | 16 | 石田敬一 |                                         |

## ひろば

### 大相撲について一言

名古屋市 石田敬一

大相撲の暴力事件や横綱の品格の話題が巷を賑わしていますね。

そもそも相撲の起源は荒っぽいもので、垂仁天皇七年の記事に「**各舉足相蹴則蹴折當麻蹶速之脇骨亦踏折其腰而殺之**」とあり、出雲の野見宿禰と大和の當麻蹶速が足で蹴りあう「**掬力**」を行い、野見は倒れた蹶速を踏み付けて殺します。その起源においては角力が武術であったということでしょう。

しかし、奈良時代から平安時代には宮中行事として天覧相撲が行われ、その後、農作物の豊凶を占い五穀豊穰を神に感謝する神事相撲が生まれます。

特に江戸中期以降、大相撲は、神道の影響を強く受けて現代にまで続いています。

「東海の古代188号」（2016年4月）において、『隋書』東夷伝高麗條に記された「**蹲踞**」について触れました。高麗人は、神前での敬意を表す姿勢である蹲踞を好むとあります。蹲踞は相撲や剣道などで相手と見合う時に相手を敬う作法として知られています。

大相撲では、その蹲踞の姿勢で揉み手をしてから拍手を打ち、両手を広げ掌を返し手に何も隠し持っていないと示します。この作法が塵手水ちりちようずです。また、力士は土俵が神聖な場所ちからみずであることから、そこに上がる時に力水を口に含み身を清めるとともに、清めの塩をまきます。

横綱に強さだけでなく、品格や厳格さが求められるのは、相撲が神事の要素を持っている証しといえますね。

### 前回の例会の内容

#### ■『日本書紀』年表4

瀬戸市 林 伸禧

『日本書紀』の継体紀から崇峻紀までを「年表4」として整理して示し、即位や立太子などに関する諸問題について言及した。

あわせて『日本書紀』年表四（継体紀～崇峻紀、ページ数128）を配布した。

#### ■古代逸年号の文献目録について

瀬戸市 林 伸禧

古代逸年号の掲載文献について詳細を再整理した。あわせて、古代逸年号文献目録（暫定、個別逸年号編、ページ数41）を配布した。

#### ■神武天皇の東征を遺跡から探る

一宮市 畑田寿一

橿原遺跡を始めとする近畿の主な遺跡の特徴から、大和建国は3世紀後半が妥当とした。

#### ■『日本皇帝系圖』について

豊山町 磯田和則

『日本書紀』は、全30巻と系図1巻を付属していたが、その系図は現在逸失している。『日本皇帝系圖』（『続群書類従』5下）はその系図を反映したものではないかとした。

#### ■倭の五王『宋書』の倭國一その7

名古屋市 石田敬一

履中の逃亡にからんだ、多遲比野、二上山、龍田山、安曇等の地名について、北部九州の地名である可能性を示した。

なお、例会で質問のあった「立花山が二神山と呼ばれていた根拠」は新宮町役場のホームページ及びwikipediaによる。

### 例会の予定など

#### ■ 例会の予定 参加料 500円

- (1) 日 時 12月17日(日) 13:30～17:00
- (2) 場 所 名古屋市市政資料館 第2集会室  
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- (3) 参加料 500円（会員は不要）
- (4) 交通機関
  - ・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
  - ・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
  - ・市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
  - ・市バス「清水口」、南西徒歩8分
  - ・市バス「市役所」、東徒歩8分
- (5) 駐車場 市政資料館：12台＋α収容（無料）

#### ■ 来月以降の例会 1月7日(日)、2月11日(日)

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を25部用意ください。

#### ■ 投稿締切り日 12月25日(火)厳守

- ・横書き。MS明朝が原則です。
- ・必ず、11ポイントでべた打ちしてください。
- ・インデントは無しでお願いします。

#### ■ 投稿先（編集担当：石田）

furutashigaku\_tokai@yahoo.co.jp